

## 『最後の吟遊詩人の歌』における 口承文芸と読者の関係

佐 藤 貴美子

『最後の吟遊詩人の歌』(The *Lay of the Last Minstrel*, 1805)はウォルター・スコット(Walter Scott, 1771-1832)が最初に書いた長編詩である。スコットの本家筋にあたるダルキース伯爵夫人(後に第4代バックルー公爵夫人 Harriet Townshend, 1773-1814)に、伝説のいたずら好きな妖精ギルピン・ホーナー(Gilpin Horner)のバラッドを作ってほしいと言われたことがきっかけで作られた作品で、元々は『スコットランド辺境歌謡集』(*Minstrelsy of the Scottish Border*, 1802-03)の模倣バラッドの巻に入れられる予定だった。『吟遊詩人』は枠物語になっており、外側は老いた吟遊詩人がニューアーク城を訪れ、城主のバックルー公爵未亡人(Anne, Duchess of Buccleuch and Monmouth, 1651-1732)に歌を披露する17世紀末の話、内側はバックルー家の三日間の出来事が六編で構成された16世紀半ばの話である。それぞれの場面の前後は老 minstrel と公爵夫人の問答が置かれている。

枠物語の二つの時間枠に加え、「物語詩」(“The Narrative Poems” in *the Edinburgh Companion to Sir Walter Scott*, 2012)の著者ラムズデンとマッキントッシュは、語り手である老 minstrel が読者に直接語りかける三つ目の時間枠があると指摘する。さらに、一見境界地方の和平と統一を表象するかに見えるエンディングでの語り手の復活(城主夫人への語りの後、近くに居を構え旅人に語り始める)にも、スコットの時代には登場人物がすべて他界しているという反語的な状況があることを挙げ、この終わり方にスコットの懐疑心が示されており、ス

コットとロマン派第二世代に共通する特徴だと述べている (35-46)。

本論でも語り手の読者への語りかけを検証の一つとして取りあげることが、本論では、語りかけは読者の注意を引くためのバラッドの手法だと提示する。懐疑的とされたエンディングについても、私は読後の読者に作品と読者自身の関係を構築させるための手法なのではと思う。本論で論証するのは『吟遊詩人』における読者と口承文芸の関りである。『吟遊詩人』に描かれたり示唆されたりしている、読み手が語ることに、聴衆が聞くことあるいは歌うことという両者が空間を共有しての身体的な行為の背景に、作者とバラッドの親密性があることを挙げる。スコットは幼少期からバラッドを聞き語んじて朗読し、その後バラッド集を読むようになったのだが、その粗末な印刷に失望し<sup>1</sup>、自ら印刷所を作り秀麗なバラッド集『辺境集』を出版した<sup>2</sup>。『辺境集』の出版はトマス・パーシー (Thomas Percy, 1729-1811) に倣い、一族の長に献辞を捧げ一族の栄華を強調したもののだが<sup>3</sup>、一族に捧げただけでなく、美しい印刷というハード面とテキストというソフト面の両方で読者の存在を意識していたことは書簡や小論に表れている<sup>4</sup>。スコットは「読者の能動的・主体的な態度に期待と信頼を寄せ、読み手と作品の相互関係に注意を怠らなかった」(松井 46) 作家であり、『吟遊詩人』はスコットのそのような関心が示されたきわめて初期の作品だと考えられるのである。

本論では読者と作品との関係の根底に読者と口承文芸の緊密な関係があることを検証するが、具体的には、バラッドや口承文芸由来の技や手法が『吟遊詩人』でどのように使われ、読者と関わるのかを考察していく。まず、前述した語り手による読者への語りかけがバラッドの手法であることを確認する。枠物語に入る前に語り手が聞き手に忠告するのはバラッドの常とう手段である。バラッドでは半ば形骸化しているが、『吟遊詩人』では実際にスコットの時代の読者が作品に呼応した例があるので紹介したい。物語の語り手の積極性にも言及し、

それが小説にも引き継がれていることも合わせて提示する。

次に詩の響きを考察する。ここで取り上げるのは地名を盛り込んだ行進バラッドを土台にしたと思われる箇所である。地名は読者に親近感を与えるとスコットは述べており、地名の多用はスコットのバラッド詩編集の特徴である<sup>5</sup>。『吟遊詩人』では単調な弱強4歩格・4行連交互韻の詩形を用いずに、音を重視した詩を作り上げている。それは後述するように新しい詩形であり、地名と音声を融合させて読者を楽しませ、高揚感と臨場感を与えている。

最後に『吟遊詩人』の構造について考察する。構造という枠組みでとらえると『吟遊詩人』は叙事詩あるいは昔話などの口承文芸の結末部分とは異なっている。未来を予言する、あるいはめでたしめでたしで終わらず、その手前で終わっているのである。結末部分の欠落は読者にそれを託したためではないかと思う。この提唱を導き出すため、まずストーリーに常に存在する死を通観する。ここではパーシーが提唱した“North Countrie”と言う言語的共同体が<sup>6</sup>、『吟遊詩人』では精神的な共同体となり死がすべてを凌駕する点、祝宴で三人のミンストレルが披露する歌にも死が関わる点に言及する。ミンストレルの歌にはバラッドの技法であるリフレインが使われており、リフレインは聴衆が唱和するものであったことにも触れたい。最終場面での聖書の文言も同様に聴衆に唱和を促しており、その結果読者も作品に参画し死のあとに来るであろう再生を読者に託していることを提示する。

ここで本論での言葉「バラッド詩」と「読者」について説明しておきたい。バラッド詩は通常、吟遊詩人や民衆が歌って伝えたとされるミンストレル・バラッド（伝承バラッド）、16世紀から19世紀にかけて大判の紙に書かれ、時事問題や大衆が喜びそうなゴシップも扱ったブロードサイド・バラッド、それらの素朴さ（simplicity）を真似て主に詩人によって書かれた文学的バラッド（模倣バラッド）の三つに大別される。本論では文学的バラッドである『吟遊詩人』を除き、特に

但し書きがない場合にはミントレル・バラッドを指し、『辺境集』に収録のバラッドを参照している<sup>7</sup>。

次に「読者」についてであるが、読者はスコットの時代において読み聞かせをする者と聞く者の両方を含んでいた<sup>8</sup>。『吟遊詩人』は16世紀の物語の外（17世紀）に語り手と聞き手がおり、その外側に作品を読む（読み聞かせをする者と、聞く側の）読者がいる。この2層を明確に区別するため本論では、17世紀の「語り手」と「聞き手」、1805年以降の「読者（朗誦する読み手と聴衆、一人で読む読者を含む）」と言葉を使い分けることにする。

### 1. 読者と語り手の能動性

「もしあなたが美しいメルローズ寺院のほんとうの姿を眺めたいのなら / 青白い月光の夜に訪れるとよい / 明るくて鮮やかな日射しは / 薄暗い廢墟を飾り立てはするがざざ笑うかのようだから」(2.1.1-4) と始まる第2編冒頭は、“If thou would'st view…”の“thou”が17世紀の公爵夫人に語りかけたものなのか作品の読者になのか判然としない箇所である。ラムズデンとマッキントッシュは、そこに1805年の作者の声があり作者から読者への語りかけだと述べて、スコットの友人であり評論家でもあるフランシス・ジェフリー（Francis Jeffrey, 1773-1850）の「同時代の読者に崇高の感情を喚起させている」との評言を紹介した(39)。私も同様に考えるが、それはこの箇所に同時代の読者が積極的に関与しているからである。

ワシントン・アーヴィング（Washington Irving, 1783-1859）の『ウォルター・スコット廷訪問記』（*The Crayon Miscellany*, 1835）には、スコットとメルローズ寺院を訪れた際の逸話としてこんな一文が書かれている。メルローズ寺院にやって来る観光客の「廢墟を訪れる熱心な巡礼者たちの多くは、昼間に見るのでは満足せず、月の光のなかで見るとでなければ意味がないと言い張った」(262) の一文である。どのく

らの割合かは不明だが、一定数の読者が作品を読んでメルローズ寺院を訪れたことがこの一文に表れている<sup>9</sup>。

観光客のこのような要望に応えたのが寺院の堂守である。雲と霧が多いスコットランドで「この詩に感銘を受けた来観者たちに必要な月の光」をどうすれば融通できるかを考え、代替品として「棒の先に二本の大きなロウソクを刺し、暗い夜には観光客を案内して回った」(262) のである。観光客はこのサービスに満足したようで、この箇所には作品を通しての読者同士の交歓を見ることができる。英国には読者同士の意見や情報交換の場として『アセニアン・マーキュリー』(*Athenian Mercury*, 1691年から1697年まで出版された定期行物)から始まり、現在も発行されている『ノーツアンドクウィアリーズ』(*Notes and Queries*, 1849-) などがある。スコットが読者の能動的態度に期待した背景には、このような読者同士が意見交換を楽しむ英国の土壤もあるのだろう。スコットは堂守の様子を面白がっては楽しんでいたと言い、作者の目前で繰り広げられた読者による作品世界との相互関係の構築を、作者自身が好ましく思っていたことがうかがえる。

次に物語の語り手の能動性について考えてみたい。前述したように、語り手の読者への「月の夜に来るといい」との忠告はバラッドの手法を用いている。例えば『辺境集』の「若者タム・リン」(“The Young Tamlane”)の冒頭では、枠に入る前に語り手は「髪に金の飾りをつけた娘さんたちよ/カーターホーの近くに行っちゃいけないよ/若者タム・リンがいるのだから」(1-4)と語りかける。元々は目の前の聴衆に関心を持ってもらうために発せられたこのような忠告は、活字となってからは昔話の発端句の役割だけのようになってしまったが<sup>10</sup>、スコットは後に、小説で語り手に多様な役割を持たせ、読者と作品をつなぐ仲介者に仕立てている。

たとえば『アイヴァンホー』(*Ivanhoe*, 1820)ではローレンス・テンブルトンと言う人物が冒頭の書簡で作品について作者の意図を代弁す

る。『供養老人』(*Old Mortality*, 1816)の語り手ジェディダイア・クリーシュボザムは物語のあとに登場して読者の代表者なる人物の質問に答える形で物語のその後を補足説明する。スコットの小説の語り手のこのような能動性は、口承文芸であったバラッドの、語り手の目の前に聴衆がいるという緊密さと、語り手は聴衆に応じて語りを変化させるという柔軟さからきていると考えられる。

以上のように『吟遊詩人』における読者の能動性と語り手の積極性を明示した。そのどちらも、スコット自身がバラッドを朗誦し、聴衆でもあり読者でもあったという身体的直接的な経験と結びついている。後に小説で用いられる語り手の補足説明的な役割の原型も、バラッドの語り手と聴衆との密接した距離感に見ることができる。

## 2. 詩の響き

『吟遊詩人』の詩形は、多くの伝承バラッド詩の韻律である弱強4歩格と異なり、1行に4つの強勢を置くだけの詩形を採用している。1連の行数は6行から20行を超えるものもあり不定で、脚韻も多様である。1830年版の序文によると、叙事詩の6歩格の詩形には読者も食傷気味だろうとスコットが考えていたちょうどその頃、彼は出版前のコールリッジ (*Samuel Taylor Coleridge*, 1772-1834) の『クリスタベル』(*Christabel*, 1816)の朗誦を聞き、ギルピン・ホーナーが登場するような突飛な詩にはごちゃ混ぜの韻律 (*this mescolanza of measures*) が合いそうだとこの詩形を採り入れたと言う (*Lay* 1874, 13)。

詩形は新しいが、読者に人気のあったバラッドの要素ももちろん採り入れている。「キンモント・ウィリー」(“*Kinmont Willie*”)や「ドデッドのジャミー・テルファー」(“*Jamie Telfer of the Fair Dodhead*”)は一門の英雄が味方を救出しに敵地へと向かう人気のあったバラッドである。行進しながら通過する地名が歌われ、スコットが編集したバラッドでは特に、地名に注釈がつけられてその地の歴史的出来事が詳述

される。スコットは地名はその地を知る人々の記憶や先祖の記録を喚起させ親近感を与えると述べている (Grierson, *I* 146)。襲撃が繰り返された国境地方では特に、土地は歴史と不可分に結びついており、だからこそ地名が盛り込まれ敵地に向かうバラッドに人々は高揚するのだらう。『吟遊詩人』にはこの形を土台にして歌った場面がある。第1篇の25連は騎士デロレインがメルローズ寺院へと馬を走らせる場面であるが、この連を見ていく前に、バラッドを「耳で聞く」ことについて触れておきたい。

『辺境集』出版の際、スコットはロングマン社からの、バラッドに登場する地名がわかるような国境地方の地図を付してほしいとの依頼を断っている。地名について注釈を加えて十分説明しているし、当時の地図は正確さに欠けることをその理由としているが (174)、私はバラッドに対するスコットの考え方にも理由があると思う。スコットは、地名に土着的な共感がありその地の描写が人々に高揚感を与えるのは、フィリップ・シドニー (Philip Sidney, 1554-86) がバラッド「チェビオットの鹿狩り」(別名「チェビーチェース」) (“The Hunting of the Cheviot” または “Chevy Chase”) から騎兵隊のトランペットの音色を連想して高揚したり、スイス人がランデバシュを聞いてうんざりしたりするのと似ていると述べている (146)。どちらの例も音と記憶の反応であり、スコットがバラッドの地名を「聞く」ものと捉えていることがうかがえる。バラッドに限らず詩も朗誦を聞いていた時代であり、朗誦者と聴衆が空間を共有し、その緊密した空間を楽しんでいたからこそ、スコットは新たな視覚的な媒体を導入することに慎重だったのではないだろうか。地図を付さなかったのは人々の地名を「聞く」行為とそこから喚起される記憶という結びつきを大事にしたかったためではないかと考えられるのである。

さて本題に戻り、以下にデロレインがメルローズ寺院へと向かう場面を引用する。音が感覚へと訴えかける描写がスコットの詩で最高で

あるとの指摘がすでになされている箇所である (Lumsden and McIntosh 38)。1 連全部を引用する：

Soon in his saddle sate he fast,  
 And soon the steep descent he past,  
 Soon crossed the sounding barbican,  
 And soon the Teviot side he won.  
 Eastward the wooded path he rode,  
 Green hazels o'er his basnet nod;  
 He passed the Peel of Goldiland,  
 And crossed old Borthwick's roaring strand;  
 Dimly he viewed the Moat-hill's mound,  
 Where Druid shades still flitted round:  
 In Hawick twinkled many a light;  
 And soon he spurred his courser keen,  
 Beneath the tower of Hazeldean. (1.25.1-13)

この連において、冒頭から 4 行目までは“soon”が毎行に置かれて /s/ の音が繰り返されている。“Soon”の意味に引っ張られた /s/ から、急いでいる様子と風を切る音の両方を演出していると考えられる。5 行目から 10 行目までは最後の音が /d/ で統一され、文中にも破裂音の /d/ または /t/ が多用されて馬が走る様子を表している。8 行目では /d/, /t/ とともに顫動音の /r/ も繰り返され、馬が小川を渡る様子も音で描き出している。

地名もまた詩の響きで演出されている。例えば 7 行目の“*He passed the Peel of Goldiland*”では、Goldiland という地名の前につくのは“peel”である。あまり馴染みのないこの言葉を“a Border tower”と言う注釈をつけてまでも用い“passed”と音を揃えている。どちらにも強勢がおかれ、リズムカルである。参考までに『辺境集』の「ジャミー・テルファー」では“Goldiland”は“Gaudilands”と綴っており、『吟遊詩人』

では最後の /d/ を揃えるために地名に手を加えたとも考えられる<sup>11</sup>。8行目の“Borthwick’s roaring strand”（「ジャミー・テルファー」では“Borthwick water”）、9行目の“Moat-hill’s mound,”あるいは27連5行目の“On Minto-crags the moon-beams glint”の“Minto-crags”なども音と固有名詞を関連づけ柔軟に対応している。

前述したように、スコットが『吟遊詩人』で使用した詩形は1行に4つの強勢があればいいという形であり、音節の数に制限がないことから比較的自由に創作できる。音を重視しながら巧みに地名を挿入し、格調高い詩の響きと簡素なバラッドを融合させて独特の調べを作り出すことで、馬の疾走に心躍り、一緒にその地を駆け抜けるような臨場感を読者に与えている。

### 3. 口承文芸の構造

#### a. 境界と死

『吟遊詩人』でのスコットランドとイングランドの境界は曖昧である<sup>12</sup>。同君連合（1603年）以前には両国間には境界線が存在しており、境界線を越えての襲撃や略奪は多くのバラッドに歌われた。『吟遊詩人』は16世紀の話であり、イングランド側からスコットランド側への侵入から始まり、休戦、決闘、祝宴とストーリーが展開するが、この流れに沿うように境界は絶対的なものから一時的な消滅を経て消滅へと変化する。この流れを詳しくみていきたい。

彼らが一触即発の状態にあるとき、イングランド側からの攻撃は“Southern force”（1.6.7）と呼ばれ、バックルー家の跡取りは彼らに向かい“False Southron”（3.19.4）と悪態をつく。スコットランド側から見れば当然のことながらノーサンバーランドは南にあり、スコットランドではそう呼ばれているのである。地理的な境界はそのまま南北に隔てられた彼ら自身の距離感でもある。

だが決闘前の休戦状態では空間的な境界が一時的に消滅している。

戦では敵同士だが、饗宴では両者はフットボールやボーリングに興じ、酒を飲み歓声をあげる (5.6.8)。だがこれらの交歓が一時的なものにすぎないことは、彼らが「籠手をはめたままで握手を交わし」(5.6.13-15)「バイザーをあげて挨拶し」(5-6 16) 酔うと帰属するクランの英雄の名を叫ぶ描写から推察できる (5.8.13-14)。次の日には敵味方に別れると知ったうえでの刹那的な交流なのである。

決闘後、敗死したイングランド側の騎士にスコットランドの騎士はこう語りかける、「ここら北部一帯では (“In all the northern counties here”) / 馬銜と拍車、槍が合言葉の一帯では / 盗みにかけてお前の右に出るものはいなかった」(5.29.15-17)。スコットはこの合言葉と合言葉が流布した地域「ウーズ [川流域] からベリックにかけて」をドレイトン (Michael Drayton, 1563-1631) の地誌的な詩『多幸の国』(*Poly-Olbion*, 1613-22) から引用した。この地域はヨーク州以北のイングランドにあたり、ドレイトンの地誌ではスコットランドは含まれない<sup>13</sup>。が、この場面では “here” とイングランド北部とスコットランドを包括して「北部」と呼び、「チェビーチェース」さながらに、お前が生き返るのなら領地をあげるのに、と騎士の死を嘆くのである<sup>14</sup>。ここでは敵同士という両者の垣根は死によって除かれ、略奪という体験が共有されて空間的な境界を超えた仲間意識を作り出している。

祝宴の最中にギルピン・ホーナーが消えるという超自然現象を目の当たりにした両側の領主たちはメルローズ寺院を巡礼する。宴の刹那的一時的な境界の消失と異なり、ここでの領主たちは肩書を示すような衣服・装飾物が取り払われて一様化され、裸足で粗末な痛悔服に身を包み祭壇に向かって厳かに歩を進める。「死者への讚美歌」(“Hymn for the Death”) と書かれた内側の物語最後のスタンザでは、天と地が消え去る日に罪びととともにいてほしいという神への祈りがある。対峙するのは人と神だけであり、死 (天と地が消え去る日) を前に人は一様化され境界は消滅する。

以上のように最終的に死に帰着する流れは、ストーリーのキーワードにも表れている。ここではまず“pride”に焦点をあて、その後“pride”が愛や死とどのように関わるのかを概観していく。

“Pride”あるいは“proud”（以下“pride”一語で代用）は本文中に29回使われている。キーフレーズとなるのは序盤で山の精の「驕りが消え去り、愛が解き放たれるまでは」（“Till pride be quelled, and love be free” 1.17.10）星はいい影響を及ぼさないと言う予言であり、本文中には“pride”で騎士やウォルター卿未亡人の驕りや誇りの高さを表す描写が多くあり、クランの属性として“pride”が使われ、それが諸悪の根源であるかのように単純化されている<sup>15</sup>。決闘の後、城主夫人が愛娘マーガレットと宿敵の一門の騎士クランストン卿の結婚を許し「驕りが消え去り、愛は解き放たれたのだから」（“For pride is quelled, and love is free.” 5-26 7）と宣言し、領主たちが巡礼を行い彼らの「栄光が遠のき、驕りがなくなり、名声を忘れ去る」（“Gone was their glory, sunk their pride, / Forgotten their renown;” 6.29.8-10）まで、“pride”は物語を支配するのである。

驕りは消え愛が解き放たれたはずなのに、祝宴になっても愛はあまり語られない。宴で歌う minstrel の一人は「愛はすべての支配者」だと歌うのだが、その歌は死で終わる。老 minstrel は、幸せな結婚を語るより領主たちの巡礼を語ることを選ぶ。その語りは「死者への讚美歌」で締めくくられており、死が解き放たれたはずの愛を阻害している。タイトルの「最後の」(The Last) が示すように<sup>16</sup>、実は死は、最初の設定から最後までずっと存在している。以下にそれをみていきたい。

老 minstrel が訪れたのはニューアーク城である。城主だったバックルー公爵（James Scott, 1<sup>st</sup> Duke of Monmouth and Buccleuch 1649-1685）はジェイムズ二世の即位に反対し反乱を起こして処刑され、城は公爵未亡人が守っていた。語りを聴きに集まってきたのは女性ばかり

りで若君もおらず、一家は没落に向かうかのようなのである。さらに、老ミンストレルの語りはウォルター卿 (Walter Scott of Buccleuch, 1495-1552) がカー一族に殺された直後のブランクスラム城からでありここにも死が存在する。老ミンストレル自身も「最後の」が示すように最後の代の語り手であり、一人息子が戦死し師匠も死刑になっている。このように、語り手にも聞き手にも16世紀の舞台にも、すべてに死が関わっていることになる。

死は内側物語の祝宴でのミンストレル三人の歌にも存在する。紛争地域出身のグレアムは、スコットランドの騎士が愛のために死を選ぶ話を歌う。次のイングランドのフィッツレイバーはソネットを英詩に取り入れたとして名高いサリー伯 (Earl of Surrey, 1517?-47) と旧知だったという設定である。サリー伯はヘンリー八世 (Henry VIII, 1492-1547) に処刑されており、フィッツレイバーの詩は、天が汝と汝の子孫最後の代に報復を与えるとヘンリー八世を呪詛しチューダー朝の終わりを暗示する。スペンサー連で書かれた5連の詩の中にサリー伯とヘンリー八世二人の死が織り込まれているのである。オークニー諸島出身のハロルドのバラッドは対岸の舞踏会にいる若君の愛を得ようと荒れた海を渡ろうとした姫が海で死ぬ話であり、ここでも死が愛の前に立ちはだかっている<sup>17</sup>。以上のように、祝宴で歌われたバラッドはどれも死に関わるのである。

ここでバラッドの技法に触れておくと、グレアムとハロルドの歌はバラッドに典型的な弱強4歩格・4行連交互韻の詩形である。グレアムの歌ではリフレインも用いられている。リフレインとは4行目あるいは2行目と4行目に置かれたストーリーと無関係な言葉の繰り返しを言う。かつて多くのバラッドは歌われており、リフレインは語り手(歌い手)を休ませると同時に聴衆に唱和させる機能を持っていた。活字になった伝承バラッドでは、これらのリフレインは省略され1回しか書かれない傾向にある (Friedman xxii-xxv)。文学的バラッドでは

リフレインは少しずつ変形され、もはや唱和の機能を持たない<sup>18</sup>。グレアムの歌では一連最終行の「愛は常にすべての支配者となるであろうから」(“For Love will still be lord of all” 6.11.4)の“will”が“was,” “may”と形を変えて歌われており、最終行はリフレインと言うより文学的要素が強い。ここにあるのはかつてバラッドが歌われていたと言う唱和の名残と『吟遊詩人』が文学的バラッドであると言う確認である。

枠の外側の最終連では、語り終えた老ミンストレルはさすらう(“pilgrimage” 6.31. 飾り線以下4行目)ことをやめ、ニューアーク城のそばに居を構えた<sup>19</sup>。クランの襲撃が盛んだった時代の「12月の雪や7月の全盛期」(1.21.10)のような描写の代わりに、7月の夕方にはヒースが芳香を放つとき(6.31. 飾り線以下16行目)、と穏やかな描写になっている。夕方の先には夜がある。老ミンストレルは跡取りもなく死を迎えるばかりであり、外側の最終連でも夜(死)に向かうところで物語は終わっている。

以上のように、クランの属性として示された“pride”が消え愛が解き放たれたはずであり、愛はすべての支配者であるはずなのだが、愛の前に立ちただかっているのは死である。結婚した二人の愛も語られることはなく、内側の物語の最後は「死者への讃美歌」である。居を構え、語りを再開した老ミンストレルがほどなく迎えるであろうものも死なのである。死でのエンディングは何を意味するのだろうか。

## b. 読者に託された「再生」

ここで少し間口を広げ、バラッド以外の口承文芸の構造を考えてみたい。昔話の構造は、子供に語る教訓の要素が大きいため主人公の出発—課題—課題の達成—帰還で終わるのが一般的である<sup>20</sup>。伝承詩である英雄詩の場合には、物語の中途から始めて発端を回想的に追加し、未来を予言して終わるものとされている(「伝承詩」)。バラッドの場

合には、幅広いジャンルを含み語り手の裁量によるところが大きいので定式があるわけではない。

ここで『吟遊詩人』と比較したいのはトマス・パーシーの『ワークワースの隠遁者』(*The Hermit of Warkworth*, 1771)である。この作品はパトロンであるノーサンバーランド公爵夫人(Elizabeth Percy, Duchess of Northumberland, 1716-76)に献呈し、民謡連で書かれた模倣バラッドである<sup>21</sup>。語り手は没落から物語を語り始め、結末では行方不明であったパーシー家の跡取りを発見しパーシー家の名誉を回復、跡取りは立派な9人の息子に恵まれて終わる。このストーリーの構造は英雄詩と一致する。一方で『吟遊詩人』はクランの末裔の長に献辞を捧げ、没落から語り始めるのは『隠遁者』と同じでありながら、未来を予言することもなく衰退の状態のままで物語を終わらせているのである。

私は『吟遊詩人』の結末部分は読者が埋めるために残された意図的な空白なのだと思う。それはテキストの構成にも示されており、枠の内側の最後にある「死者への讃美歌」の4行の前に一行の空白があげられている。内容は神への祈りなのだが、一行あげたことで、領主たちの祈りなのか老ミンストレル自身の祈りなのかははっきりしない<sup>22</sup>。この4行では、聖書の創世記を暗示するような“wakes from clay,”最後の審判を思わせる“judgement,”そしてマタイによる福音書からの引用“heaven and earth shall pass away”(Matt. 24.35)があり、読者に身近な聖書の文言を用いている。この箇所はあえて誰の祈りなのかを示さず、また聖書の文言を喚起させることで、物語の一番外側にいる読者も共に神に祈れるような工夫があるのではないか。神に祈り、作品世界へ参加した直後に読者は現実世界へ戻ることになる。

本を閉じ、現実世界に戻ったスコットの時代の読者は、『吟遊詩人』が彼らの現実世界とつながってはいるが、彼ら自身の環境は全く変わったことを実感するだろう。どちらの物語の後にもスコットランドにとっての歴史的な出来事、同君連合(1603年)と合同法制定(1707年)

がある。巡礼によって消滅した精神世界の境界は、現実世界でも消滅した。語り手のいた外側では、城主だったバックルー公は謀反により斬首され、バックルー門は衰退し没落寸前であるかのようにであった。だが読者のいる世界ではバックルー族は広大な敷地を持つスコットランドの名門である。何より子孫のウォルター・スコットが『吟遊詩人』を出版し人気を博している。物語の終わりから現実世界までの空白は、このように読者自身が回想し埋めることができる。『吟遊詩人』の語り手が死で物語を終わらせたのは、口承文芸の構造から逸脱したのではなく、物語の終わった17世紀終わりから出版までの100年余りの空白を読者に埋めさせ、その後の「再生」を読者に委ねたのだと考えられるのである。

「再生」とは何か。読者がバックルー門の再生に思い至ることは容易であろう。空白部分を補えば『吟遊詩人』も『隠遁者』と同じような英雄詩の構造になる。では枠の内側物語で示された境界の消滅後の再生はどうだろう。境界の消滅後の再生、すなわちスコットランドとイングランドの統一や平和こそ、作者が空白にして読者に託したのではないだろうか。スコットは『辺境集』の序文の最後を「このような贈り物〔『辺境集』の出版〕は些細かもしれないが、かつて誇り高く自らの足で立っていた王国のたてがみに、あえて表すことはない複雑な感情とともに、その祭壇に捧げる」の一文とともに、「アルバニア」と言う詩で結んでいる（cx）。自らの複雑な感情はそのままに、読者に再生を委ねたのだと考えられるのである。

本論では口承文芸と読者の関りを検証してきた。『吟遊詩人』には作者と口承文芸の親密性が示されている。目の前の相手との空間の共有と、語る（読む）—聞くと相對することによる応答が作者の経験としてあるからこそ、読者と作品の間にも同様の、密接した距離感を作り出そうとしたのだと考えられる。その親密性を構築するための役割

は、後に小説の語り手に引き継がれている。『吟遊詩人』は人気を博した文学的バラッドとしてだけでなく、口承文芸の機能を小説になく媒介としても存在しており、スコット作品のなかで重要な位置づけの作品と言える。

注)

- 1 「小さい時からこの種の〔トマス・パーシーの『古英詩拾遺集』のような〕伝承物語が大好きだったが、がっかりしていたのは種類の少なさと自分の持っていた本の粗雑さ（“rudeness”）だった」（Lockhart 29）
- 2 初版時の『辺境集』の批評には「堂々とした口絵、上品なクリーム色の紙を使った美しく当世風な境界地方の出版物」とその美しさへの賛辞がある（*The Monthly Review* 42, 1803）。
- 3 『辺境集』とパーシーの『古英詩拾遺集』（*Reliques of Ancient English Poetry*, 1765）の比較は拙論「ミnstrelとしてのバラッド詩編纂」を参照されたい。
- 4 たとえばパーシーへの書簡には「〔『拾遺集』でパーシー司教がなされたことに倣いまして〕各バラッド一編一編に序文や注釈をつけ、登場人物や、バラッドに歌われている歴史や慣習を補って読者に紹介したいのです」（“To Thomas Percy,” Oct. 6, 1800. *Letters* 12 168）
- 5 スコットのバラッド編集の特徴としての地名の使用については拙論「バラッド編集におけるウォルター・スコットの歴史観」を参照。
- 6 パーシーは『拾遺集』の小論「古いイングランドのミnstrelに関わる小論」（“An Essay on the Ancient English Minstrels”）のなかで、バラッドには北部訛りの語りが多いことから「ほとんどのミnstrelは北部の出身」であり、「その卓越さを称して北部出身（“of the North Country”）と記される」と述べ、イングランド北部とスコットランドのミnstrelを「北部出身」と一括りにした（XLIX）。

この引用符つきの“of the North Country”は、それに呼応するかのようにはスコット周辺のバラッド研究者の作述に散見され、パーシーの説を補強している。バラッド収集家でスコットの友人ロバート・ジェイミソン（Robert Jamieson, 1772-1844）は、北欧諸国の詩とスコットランドのバラッドの類似性を指摘した。ジェイミソンはスコットへの手紙で「スカルド詩は“North Country”の中で生き続けている」と述べ、引用符つきの“North Country”を3回用いてこの言葉を強調し、“North Country”をイングランド北部とスコットランドのローランド地方とした\*（84-98）。（\*ジェイミソンはスコットランドのバラッドとデンマークのバラッドを翻訳したものを一緒にして出版。スコットへの手紙も収録。）

同じくスコットの友人で、詩人のジョージ・エリス（George Ellis, 1753-1815）は、中英語で書かれた韻文ロマンスを紹介する『初期英語の韻文ロマンスの実

例) (*Specimens of Early English Metrical Romances*) を 1805 年に出版した。その序文で、北部の詩人が歴史家に称賛されているとし、北部の詩人にアルセルドゥーン、ケンダル、エグリントンのヒューと言ったスコットランドとイングランド北部両方の詩人を挙げ「どんな古いバラッドも『北部地方』 ミンストレルの優秀さを裏付ける」の「北部地方」には引用符付きの “from the North country” を用い「チョーサーより前の時代のイギリス南部の詩人による作品はない」と “a poet of South-Britain” とイギリスを母体にして北部と南部を相対させた (125)。

スコットは英語の形成において南北を対比させた。1804 年出版の『サー・トリストレム』 (*Sir Tristrem*) の中で、英語の形成がイングランド南部より「北部とスコットランドのローランド地方」の方が早かったとこの地域を括ってイングランド南部と相対させ「『北部地方』 (“North Countree”) のハーブ弾きとミンストレルはバラッドの比類なき素晴らしさによってあまねく称賛され、「ほほすべての英語のミンストレル・バラッドは北部で生まれた形跡があり、それは一般的には国境の両側の王国に共通する」とし、「北部」にスコットランドのローランドまでを含んだ (Ixvii-Ixviii)。このように言語で南北を分け北部にイングランド北部を含む提唱が、『吟遊詩人』の頃にスコットとその周辺にはあったのである。『吟遊詩人』ではしかしながら、南北を分けるのは言語ではなく精神世界である。

- 7 但し、伝承バラッドであっても伝承者や筆記者がブロードサイド・バラッドを参照したり、バラッド詩集の編集者が修正を加えたりしているため、伝承という名のもとに混然としているのが実情である。
- 8 「はるか昔から 18 世紀の間にかけて、多くの文学的なテキストはたとえそれが書かれたものであっても朗誦されるのが一般的であり、元々は作者本人が朗誦していた。家族や小さな集まりで読み聞かせをすることは 20 世紀初めであってもまだ一般的だった」 (Ong 154)
- 9 スコットの作品を通しての観光客の増加に関し、『湖上の美人』 (*The Lady of the Lake*, 1810) の出版によりトロサックス地方への旅行者が増えたことはよく知られている。ロックハートは出版者であるキャデル (Robert Cadell, 1788-1849) の言葉を引用し、観光客がそれまで名前も知らなかったカトリン湖に押し寄せ、近くの宿屋は人々で溢れかえったこと、スコットランドの駅馬車の需要は大幅に増加し、これらの傾向が数年続いたことを記している (211)。
- 10 昔話の「むかしむかし」などの句。「語り手は発端の句を昔話の始まりの宣言として用いようとする。それまでの日常会話や世間話や伝説と区別された昔話の文芸がここから始まることを聞き手にはっきり印象づけるのである。」(「昔話の発端の句」938L)
- 11 「ジャミー・テルファー」ではこの地名を含めたいいくつかの地名をスコット一門の歌人サッチェルズのウォルター・スコット (Walter Scott of Satchells, 1613-?) の『スコット一門正史』 (*A True History of several Honourable Families of the Right*

- Honourable Name of Scot*, 1688) から拝借している。『正史』でも *Gaudilands* と綴っている。
- 12 スコットランドとイングランドの境界が曖昧であることは、パーシーの “North Countrie” との関わりのなかでしばしば論じられる。フィールディング (Penny Fielding) は “North Country” という言葉は可変的であり、スコットランドとイングランドの境界は想像上の、理想的でロマンス的な場所であると述べた (92)。さらに『辺境集』では法による取り締まりが多く言及されていることから、スコットの境界地方は、戦闘的な過去と、それを愛国心という枠組で規制する近代の二面があると述べている (94)。しかしながら、パーシーの “North Countrie” は、すでに述べたように言語的な共同体として提唱され発展した。
- 13 ドレイトンの『多幸の国』はイングランドとウェールズの地名を辿った地誌的な長編詩。
- 14 「吟遊詩人」 “I’d give the lands of Deloraine, / Dark Musgrave were alive again.” (5.29.22-23)  
 「チェビーチェイス」 “... / Erle Dowglas, for thy life, / wold I had lost my land!” (第38連。F. J. チャイルド (Francis James Child, 1825-96) のバラッド集の “The Hunting of the Cheviot” 162B 版を用いた)
- 15 山の精の予言は娘の結婚を許してやれという諫言の一部なのだが、ウォルター卿夫人は「心臓を高鳴らせ、気位高く (“with pride”) / 娘が仇敵に嫁ぐ前に / 山はひしゃげ / 川の水は逆流するだろう」(1.18.10-13) と、娘マーガレットとカー一族の騎士であるクランストン卿の結婚はあり得ないと言い放つ。そのクランストン卿と騎士デロレインが遭遇した際には、二人は「敵意むきだして問いかけ、傲慢に答えを返し (“proud reply”）」(3.4.7) 「誇り高き二人の戦士は (“these champions proud”）」(3.5.9) 決闘するのである。“Pride” は「誇り高きアングス一家 (“proud Angus”）」(4.28.16) などクラン一族全体も描写しており、主にクランの属性を表すために使われ、多くの場合良い意味で使われていない。
- 16 タイトルの「最後の (the Last)」には『オシアン集』 (*Works of Ossian*, 1760-63) が持つ終末性 (Ossian’s finality) があり (Pittock 189)、タイトルにすでに死が示唆されている。
- 17 ハロルドはオークニー諸島出身で、オークニーでサガに、ミドロージアのロスリンでスコットランドのバラッドに触れ両方が融合されたバラッドを歌う。「スカルド詩が “North Countrie” の中で生き続けている」とのジェイミソン (Robert Jamieson) の主唱どおり、オークニー諸島でサガと出会う設定である。
- 18 バラッド詩研究者のブロンソン (Bertrand Harris Bronson, 1902-1986) は “Edward” 「エドワード」のリフレインを例に、リフレインのパートはかつて唱和の機能を持っていたが、歌い手が変形して歌うことにより聴衆は割り込むことができないと述べている (10)。
- 19 数は少ないが “pilgrim” と “pilgrimage” も看過できない言葉である (本文中に “pilgrim” と “pilgrimage” は 5 箇所、注に “pilgrimage” は 1 箇所。以下 “pilgrim”

1語で代用)。OEDによれば、聖地を旅する巡礼者としての意味以前から、“pilgrim”には「放浪する、さすらい」という意味があり『吟遊詩人』では両方の意味で使われている。一つは騎士の巡礼であり、もう一つは老ミンストレルのさすらいである。

騎士の巡礼は三場面で描かれている。一つ目は、スコット家とカー家の間で結ばれた、相互にスコットランドの4つの修道院へ巡礼するという盟約においてである。本文では「いや！無駄だったのだ、聖地への／巡礼にすがるうとしたのだが」(1.8.5-6)と歌われている盟約は、ウォルター・スコット卿が企てた、幽閉されたジェイムズ五世の救出劇(1526年。未遂に終わった)に端を発した両家の不和を解消するためであった。だが盟約は功を奏せず、結局ウォルター卿はカー一家に殺害された(1552年)。二つ目は、奉納を目的としたクランストン卿の巡礼である。巡礼先の聖マリア教会にウォルター卿夫人が一族を連れて奇襲をかけたこと、企てを知ったクランストン卿は事前に逃げたことが語られている。三つ目の巡礼が先述した領主たちによる巡礼である。敵味方に別れたままでは巡礼はうまくいかなかったのだ、ということが、最後の巡礼と対照するために置かれている。最終連で老ミンストレルもさすらいを終えている。

飾り線以下～：連の途中で老ミンストレルが登場する場合には間に飾り線が引かれている。

- 20 「桃太郎」、「白雪姫」など洋の東西を問わず、主人公が発すると難題を解決し帰還する。めでたしめでたしで終わるのが一般的である。
- 21 民謡連(ballad meter)とは弱強4歩格と3歩格の4行連からなり、交互または2行目と4行目のみ脚韻を踏む。
- 22 初版以降この箇所には一行の空白がある。『吟遊詩人』において、物語内側の連の途中で空白があるのはこの箇所しかなく、意図的なものであることがわかる(注19で述べたように、連の途中で老ミンストレルが登場する場合には間に飾り線が引かれ、時間の隔たりを視覚化している)。

#### 参考文献

- Bronson, Bertrand Harris. *The Ballad as Song*. Berkeley: University of California Press, 1969.
- Child, Francis James, ed. *The English and Scottish Popular Ballads*. Vol. 3. 1889. Mineola, NY: Dover, 2003.
- Drayton, Michael. *The Works of Michael Drayton, Esq. containing Poly-Olbion*. Vol. 3. 12 September, 2018. London, 1753.  
<https://www.archive.org/details/worksmichaeldra00draygoog>
- Ellis, George. *Specimens of Early English Metrical Romances*. 1 September, 2018. 1805, London.  
<https://books.google.co.jp/books?id=2c8TAAAAQAAJ>
- Fielding, Penny. *Scotland and the Fictions of Geography: North Britain, 1760-1830*.

- Cambridge: Cambridge UP, 2008.
- Friedman, Albert B, ed. *The Viking Book of Folk Ballads of the English-Speaking World*. Harmondsworth: Penguin, 1982.
- Grierson, Herbert, ed. *The Letters of Sir Walter Scott*. 12 vols. Centenary Edition. London: Constable, 1932-37.
- Irving, Washington. "Abbotsford." *The Crayon Miscellany. The Works of Washington Irving*. vol.8. 1889. NY: G. P. Putnam's, 1973.
- Jamieson, Robert. *Popular Ballads and Songs, from Tradition, Manuscripts, and Scarce Editions; with Translations of Similar Pieces from the Ancient Danish Language*. Vol.2 1806. Kessinger, 2004.
- Lockhart, John Gibson. *Narrative of the Life of Sir Walter Scott Bart, Begun by Himself and Continued by J. G. Lockhart*. London: J. J. Dent & Sons, 1913.
- Lumsden, Alison, and Ainsley McIntosh. "The Narrative Poems." *The Edinburgh Companion to Sir Walter Scott*. Ed. Fiona Robertson. Edinburgh: Edinburgh UP, 2012.
- Ong, Walter J. *Orality and Literacy*. London: Routledge, 2002.
- Percy, Thomas. "An Essay on the Ancient Minstrels in England." *Reliques of Ancient English Poetry*. Vol. 1. Leipzig: Bernhard Tauchnitz, 1866. Elibron Classics. 2005.
- Pittock, Murray. *Scottish and Irish Romanticism*. Oxford: Oxford UP, 2011.
- "Scott's *Minstrelsy of the Scottish Border*." *The Monthly Review*. Sept 1803: 21-33. 30 August 2018.  
<https://books.google.co.jp/books?id=cvLkAAAAMAAJ>
- Scott, Walter. *Ivanhoe*. 1820. Ed. Ian Duncan. Oxford: Oxford UP. 1996.
- . *The Lay of the Last Minstrel*. 1 September, 2018. 1874, Edinburgh.  
<https://archive.org/details/laylastminstrel18scotgoog>
- . *The Lay of the Last Minstrel: A Poem*. 13<sup>th</sup> ed. London, 1812.  
 Facsimile, Biblio Life. 2009.
- . Introduction. *Minstrelsy of the Scottish Border*. 12 September, 2018. 1802, Kelso. Vol. 1  
<https://books.google.co.jp/books?id=9m1bAAAAQAAJ>
- . *Old Mortality*. 1816. Ed. Jane Stevenson and Peter Davidson. Oxford: Oxford UP, 2009.
- . *Sir Tristrem*. 1 September, 2018. 1804, Edinburgh.  
<https://www.archive.org/details/sirtristremamet01thomgoog>
- Scot, Walter. *A True History of several Honourable Families of the Right Honourable Name of Scot*. Edinburgh, 1688. Re-printed in 1776.  
 19 August 2015.  
<https://archive.org/details/atruerhistorysev00scotgoog>
- 佐藤 貴美子 「バラッド編集におけるウォルター・スコットの歴史観」『CALEDONIA』37、日本カレドニア学会、2010年。

--- 「ミンストレルとしてのバラッド詩編纂——三つの側面から見た『拾遺集』と『辺境集』」『CALEDONIA』45、日本カレドニア学会、2017年。

「伝承詩」(epic poetry)『ブリタニカ国際大百科事典 電子辞書対応小項目版』  
Britannica Japan, 2008年。

松井優子 「『ウェイバリー現象』——越境するテキストと十九世紀読者層の創出  
(および忘却)」『読者ネットワークの拡大と文学環境の変化——19世紀以降にみる  
英米出版事情』音羽書房鶴見書店、2017年。

「昔話の発端の句」『日本昔話事典』稲田浩二、大島建彦、川端豊彦、福田晃、三  
原幸久編集、弘文堂、1999年。